山口賀史先輩に――ひとつの時代のカラクテール

林　　以知郎

その方について思いを綴らせて頂こうとするときに，先生とお呼びする以外にもっと相応しい言葉で語らせて頂きたい，のっけからそんなふうに戸惑ってしまう方は，私たち教員の繋がりの中ではそう多くはいらっしゃらない。昨春にご退職を迎えられた山口賀史先生に送る言葉を綴りはじめた際に，自然に出てきた言葉は，山口先輩であった。私にとって先生との出会いのかたちは，文字通りに先輩と後輩としてのものだった。私たちの世代が英文学科の来し方について語るとき，いつも始まりは新町，尋真館になってしまう。あれは第二次の学園闘争の名残がキャンパスのあちこちにまだ感じらとられる頃だっただろうか，修士課程に進んだばかりだった私は，尋真館四階にあった英文研究室の廊下で，今となっては懐かしいカード式の図書検索カードで探し物をしていたのだったと思う。当時は第二外国語の先生方も学部にご所属であったので，学部時代からお世話頂いていたフランス文学を読む集まりのために，ラ・ブリュイエールの『カラクテール』について少し調べてみる必要があったようなことを記憶している。時代模様もあいまって，内心は不安に満ちながら生意気盛りであったM１の院生にとって，パスカルは正道すぎるし，かといってロシュフーコーも辛辣が過ぎ，風刺の辛さを適度な人情で絡めたブリュイエールは，格好の読み物だったのだろう。ふと廊下の西奥に目をやると，向こうから歩みを進めてこられる姿がある。長髪にジーンズといういでたちが時代の風景だったあの頃に，三つ揃いのスーツ，というその方の佇まいは眼を引いた。お名前は存じ上げていたので手を止めて最敬礼した私に，先輩がなんと返されたか，うー，とおっしゃられたか，なにも発

せられなかったのか，ただただ委縮していた私は記憶していない。それから四十年経つのだが，新入りの下級生に怖じ気を感じさせたその先輩が，風刺の鋭さと人情の厚みを兼ね備えられた，複雑で豊かなキャラクターとしてしだいに立ち現れてこられる，長い時間の始まりだった。ブリュイエールに倣って，山口先輩のカラクテールを綴らせて頂きたい。

ほどなくして，先輩は専任講師として，私は助手として職場を同じくすることになったわけだが，助手室勤務の身でフルスタッフの方とそう近しい間柄になれるわけではなかった。そんな怖じ気を取り払うことが出来たのは，職場を離れたところでだった。先輩と私とが，合衆国北東部にあるそれぞれの大学へと在外研究をさせて頂く機会を与えられたのは，奇しくも同じ時期だった。ニューハンプシャーとマサチューセッツと隣り合わせた州に遊学した私たちは，何度かボストンの街で顔を合わせることが出来た。今でもまだ営業しているのだろうか，ダウンタウンにあった日本料理・雑貨店Yoshinoyaで手に入れた烏賊を凍ったまま，いかにして州境を越えて搬送するか，駄洒落の名手のそんなバカ話が異国にある寂寞を忘れさせてくれたものだった。そんな寛ぎと包み込み，それが先輩固有のキャラクターであることは衆目の認めるところだろう。おりしも，まだ四十歳になられたばかりの頃であったか，岩山太次郎先生が公用でボストンを訪われ，先輩と私と，ともに夫婦そろってお迎えすることがあった。手元にある一葉の写真に留められているが，コプリー広場にあるホテルのお部屋で食事とお酒を頂戴しながら，カーテンを開け放った窓から美しい古都の夜景を眺めた記憶は，つい昨日のことのように鮮やかに覚えている。七十年代後半のアメリカはまだ今のように老いてはいなかったし，私たちもまた，若かった。

在外研究期間が明け，先輩は学科での業務に復帰され，私もまた学科のスタッフに加えて頂いて，見様見真似で教えることをし始めたのだが，研究と教育労働との両立はようにはなり難いものだった。当時のカリキュラムでは英作文 I，II，IIIといったが，学生の英文ペーパーの添削をときには３クラス

も担当することは，駆け出しの教師の力量ではこなしきれないほどに負担だった。屈託を重ねていく私が思い余って話を聞いて頂く，その相手を務めてくださったのは先輩だった。時にはシェイクスピアの引用とプロ野球界のエピソードをあい混じらせながら，なんだかよく分からないけど要はネバー・マインドと諭してくださる口調に，なかば言いくるめられたようでもあり，でも他の方の前ではけっして感じることの出来ないであろう安堵と慰藉の感を抱いている自分がいた。他人に安堵と寛ぎの感情を分け与えることが出来る技量，それは先輩のキャラクターが発するマジックである。私たちが持つ会議の場で，ときに重苦しい空気に息詰まる思いを皆が抱かねばならなかった折に，先輩のマジックに場が和み救われる経験は誰しもが記憶している。その先輩が，ときには決して揺るがない剛さを見せられるときがあることも，また存じ上げている。京田辺校地開講の前年，二校地にわたる学務の滑らかな移行に取り組まねばならない困難な時期に，先輩は学科の教務主任を務められた。二校地化に臨みカリキュラムの改定を試みてきた学科にとって最大の課題は，「英米の文化」科目の設置だった。英文学科の教育領域の基盤に「文化」を据える発想に立ち，オムニバス形式で担当される初年次導入講義であったが，学科構成員の間ではこの新科目設置をめぐって意見の隔たりがあった。当時教授会の場でもあった尋真館四階会議室で長い学科会議を重ねながら，論の収束はようとして見えなかった。学部教授会開会を同じ会議室で次に控え，時間切れなのか，と末席に座る私などでさえ胃が捻じれそうな焦燥を覚え始めたときに，先輩は腹を括られたのであろう，科目の詳細と担当体制が記された文書を収めた茶封筒を手に掲げながら，議事の終息を告げられた。決然，という言葉が相応しいほどに，揺るぎのない表情をされていたのを思い出す。あのときに決断されて学科を押し出された方向は，けっして間違ってはいない選択だった，と今でも先輩に申しあげることが出来る。

柔らかな和みと揺るがない剛さ，先輩のキャラクターの中で微妙にバランスを形作っているこのふたつのお顔が，ご専門であるシェイクスピアへの取

り組まれかたにも繋がっていることは，門外漢にも見てとれる。文学の言葉を読む喜び，言葉をめぐる蘊蓄を語る心地よさをこよなく愛される先輩が，シェイクスピアからの一節を自在に引用し織り交ぜながら話されるのを見るたびに，芝居であっても詩であっても，個々の書き手の字体であり筆跡であるキャラクターの側面にこそ先輩が心を傾けられているのだと感じる。そしてまた, 人物の造型の妙を活写しながら, フォルスタッフの, マクベスの, キャラクター造型を世相の辛辣な風刺に転じていかれる話芸に引き込まれていった夕べは，今思い起こしても愉しい時の過ごしだった。

形式主義と自己管理という時代の流れに息継ぐことにも身構えが要りそうなこの頃の世相にあって，重苦しい場の空気を瞬時に和らげてくださった先輩の存在をこんなにも大きく感じ，またご退職なさった喪失感をこんなにも痛く感じるのは，私だけではあるまい。先輩が軽やかに風刺の的とされた世間，ブリュイエールが風刺と人情で描きとった時代の世相，そのようなものをある時代に固有のカラクテールと呼ぶことが出来るならば，そんな固有の色合いを持ったひとつの時代が確実に移ろっていく―そんな思いを反芻しながら，山口先輩に送る言葉を閉じたい。